

悪役令嬢の子

主従の愛は因縁を砕く

Characters

セラフィーナ・ルストナーク

ルストナーク王国の
王太后で、
ウイスタリアの父の
幼馴染。

ローズ・ルストナーク

『王国と光の花』の女主人公で、
ルストナーク王国の現王妃。
勇者として魔王を倒した
実績を持つが、猪突猛進な
一面もあるようで——？

サディウス・スワルド

スワルド公爵家の当主。
ガルディア公爵家とは
塩を巡って
争ったことがある。

ウィルフリード・ルストナーク

ルストナーク王国の王兄。
リリアーナを
一途に愛し続けている。

リリアーナ・ガルディア

ウイスタリアの姉で、
『王国と光の花』の悪役令嬢。
とある事件をきっかけに
領地にこもるようになった。

幼い貴方が言ってくれたのと同じように

何もなくても私がいればいいと、

……私はただ、貴方がいればいい。

キース・ウォールズ

幼少期にガルディア公爵家に
後継候補として引き取られた、
ウォールズ伯爵家の三男。
ウイスタリアが生まれたあとは、
従者として彼に付き従っている。

それがどれだけ心強かったか。

——キースは俺が俺であればいい
と言っ、ずっと傍にいてくれた。

ウイスタリア・ガルディア

ガルディア公爵家の嫡男。
大人気RPG『王国と光の花』を
プレイしていた前世の記憶を持つ。
ガルディア領を発展させるのに
邁進しつつ、とある事情と
学びのために国外に出ようとしている。

目次

悪役令嬢の子

主従の愛は因縁を碎く

7

番外編

私の花

285

悪役令嬢の子

主従の愛は因縁を砕く

第一章

——リリアーナ・ガルディア。

お前は嫉妬しとから勇者ローズに数々の嫌がらせを行い、遂には魔族に唆そそされ、この王都に魔物を溢れさせた。その事実には相違ないか。

……はい、相違ございません。

私、リリアーナ・ガルディアは魔族の甘言かんげんに惑わされて魔物を呼び寄せ、王都を混乱の渦に陥れました。ただ……ローズ様へは婚約者のいる男性への接し方など、常識の範囲で注意させていただけですが——いえ、このような事件を起こした罪人が何を言っても無駄ですわね。誠に申し訳ございませんでした。

このような事を行うような者を、王妃にすることなど出来ない。私はお前との婚約を解消する。はい、仰せのままに。

連れていけ。暫く……陛下と宰相さいしやうが戻って来るまで牢に入れておくように。

王都の防衛を勇者ローズとともに担った第二王子は、皆が集まった王都の広場で、頭こうべを垂れた一

人の令嬢を公衆の面前で直々に糾弾きうたんした。

ルストナーク王国に仕える家臣達が、魔物の襲来で戦い疲弊ひへいした騎士達が、やっと脅威が去ったと安堵する民衆が、令嬢の退場を祝福する。

ローズ……もう心配いらない。

アルフレッドさま……

王子と勇者の言葉を耳にした令嬢は顔を上げた。昏く淀んだ瑠璃色るりいろの瞳を歪めて、一瞬何か言いたげにしたが、諦めたように頭を振り、結局何も言うことはなかった。そのまま淡々肅々と糾弾を受け入れ、周りを囲む者達に深く一礼し、騎士達によつて乱暴に引つ立てられていく。

それを止めようとしたもう一人の王子は家臣たちに止められ、別の場所に連れて行かれながらも令嬢の名を叫んだ。

リリアーナ！

逃げも隠れもしませんから離してください。一人で歩けます。

自らを呼ぶその声に振り向くことなく、令嬢——リリアーナは堂々と歩いた。風に靡なびく銀糸の髪が、泣けない彼女の涙のようだった。

それが、ルストナーク国宰相の一人娘、ガルディア公爵家令嬢リリアーナ・ガルディアを表舞台で皆が見た最後となった。

（これ、この場面、どこかで……）

現実の記憶かは分からないが、今の俺の一番最初の記憶はこの場面だった。

そして次に意識が浮かび上がったときには、温かくて大きな手のひらが、優しく背中を包み込んでくれていた。布越しでも指の長さや肌の厚み、関節の感触で何となく男の人の手だと分かる。慣れている感じはしないが、抱き方を知っている手だ。

……手も足も、何も思い通りに動かせない。視界はぼやけて焦点が合わない。当たり前だった「見る」ことが、あまりできていない。

「ロータス様、リリアーナ様とフィオナ様は……」

「子を産んだばかりということを除けば、リリアーナは問題ない。フィオナは心労がたたって臥せっている」

「そうですか……この子が」

「ああ……この子は私とフィオナの子として育てる。……すまない。この子が私の嫡男ちやくなんということになれば、お前に跡を継がせるのは難しくなる。希望があるなら、出来得る限り叶えたいと思うが……」

低い声が降ってくる。最初は何を言っているのか一瞬分からず、理解は遅れてやってきた。俺はどうやら赤子で、俺を抱えている男性の話し相手は少年っぽい。

どうやら俺が産まれたことで、彼に何か不利益があるようだ。

「いいえ、ロータス様。かまわないのであれば、私はこのままガルディア公爵家にいさせていただけませんか。この子の御付きとして仕えさせていただければ、それで」

「しかし……」

「私にも、御子を抱かせていただけませんか？」

「……ああ、勿論」

そう言った少年は大切に俺を受け取り、落ちないようにと一生懸命細い腕に包み込む。抱き方がどこかぎこちなくて、でも必死に落とすまいとしている。その加減がおかしくて、なんだかとても愛おしい。

胸から伝わる鼓動が規則正しい——ああ、心臓の音か。記憶をたぐり寄せようとしてもうまく思い出せないが、こんなに近くで聞いたのは初めてかもしれない。

温かい。眠い。色んな情報を処理できず、感じたことが浮かんでは上書きされて、やがて眠気にすべてが塗りつぶされていく。これが新生児の睡眠欲かと頭の片隅で他人事のように思う。

前世の最後も、こんな風に意識が薄れていった気がする。あのときは恐ろしかったのに、今は少しも怖くない。

「……」

はらりと落ちたおくるみの端を直そうと少年の手が動く。大切なものを持つように一生懸命抱いてくれている、そんな少年の指をきゅうと握り、俺はふにやりと笑った。



小高い丘で朝日を浴びて輝く海と領地を眺めていると、潮風が髪と頬を撫でていく。

海を見ていると前世の故郷を思い出す。しかし、からりと乾いた風はどちらかというと爽やかで、記憶の中の絡むような潮風とは少し違う。

国どころか世界が違うから、当然と言えば当然である。

現世の俺の故郷——ガルディア公爵領は、ルストナーク王国の南西に位置する広大な辺境領だ。農業も盛んだし、鉱物も採れる。塩や砂糖や香辛料などの必需品も領内で扱われている。辺境と言えば辺境だが、様々な産業が発展していて裕福で、南側は海に面していることから他国との貿易も盛んである。王都を東京だとすれば、九州四国くらいの規模感、大阪名古屋くらいの発展具合かなという気がする。

ゲームの中でも、街の設備が整っていると人気だった。いい装備品やアイテムが売っていたし、辺境なので鍛える場所も多く、バランスの取れた土地だったのだ。

「ウイス様——」

「キース、おはよう」

丘の下から俺を呼ぶ黒髪の男前。

もう少ししたら戻るつもりだったのに、呼びに来させてしまっただけで申し訳ないことをした。

しかし、俺を呼びに来た男——キースは朝も早くから全く隙がない。頭からつま先まで整っていて、侍・従・なのに俺よりよほど高位貴族然としている。日傘を差しても格好いいのは何故なんだろうか。

「手間かけさせちゃってごめん」

「いいえ。それよりも、そんな格好で外に出るのは駄目ですよ」

「日傘は嫌だ。それに変な格好はしてない」

「貴方は陽射しに弱いのですから。以前こっぴどく焼けて、びいびい泣いていたのは何処のどなたでしたか？」

「でも……」

「はいはい。朝食もまだでしょう。帰りますよ」

女子か！ と内心口を尖らせたものの、正論を言われてぐっと詰まってしまう。

前世とは違う真っ白な肌は陽射しに弱く、日焼けどころか火傷のようになってしまったので、キースの言うことは正しい。でも、ただでさえ中性的な見た目をしているのに、より女子っぽくなるので日傘はやっぱり嫌だ。

かといって反論の材料はない俺は、仕方なくキースの差す日傘に入った。

沖にはもう船が何艘も漁に出ている。きらきらと輝く海をもう一度眺めて、俺はキースとともに

屋敷へと歩き始めた。

坂道を下ると、浜では早くも水揚げが始まっていた。整然と並んだ木箱に次々と魚が放り込まれていく。独特の磯の香りのする荷揚げ場を足早に通り過ぎ、街道に入ると、道の均された石畳の上を荷馬車が走っている。街に入ればパン屋なんかはもう開いており、他の店もちろはら準備をしていて、人々の一日はもう始まっているようだ。

俺を見て挨拶してくれる人達に、笑みを返しながら歩いていく。

今日も我が領は、朝から明るく賑やかである。

“王国と光の花”

ルストナークという王国を中心に、精霊の加護を持った勇者が仲間とともに魔王を倒す冒険に出るといふ、シンプルなストーリーのロールプレイングゲーム。

ゲーム開始時に主人公の性別を選択することができ、性別によってメインストーリーの内容が異なる上に、旅の仲間との恋愛要素があり、好感度によってエンディングやエピソードが若干変化するようにになっている。つまり、やり込み要素が盛りだくさんなのだ。

俺——ウィスタリア・ガルディアが二度目の生を受けたのは、前世で何度もプレイしていた王国と光の花のゲームの世界。ただし、ゲームの時間軸はとくに終わっている。それがはつきりと分かったのは、現世の姉と、初めて顔を合わせた時だった。

しかも、今世の俺には異世界転生の物語にありがちなチートはなく、前世の知識も偏っていて、

世界を大きく変えるようなものは持っていない。ゲームの知識はあるが、すべては過去の出来事なので特段役立つこともなさそうだ。

そもそも、女主人公と王子達によつて魔王は倒されているので、世界も平和だ。もし何かチートを持っていたとしても、大した出番はないだろう。

まあ、そんなものがなくても、美形ばかりの貴族の中でも群を抜いて美形な一族の遺伝子と、裕福な領地を持つ公爵家の生まれであること自体がチートなので、色々複雑な事情はあるが、ありがたい限りである。

……なんて、己の境遇を思い返しながら歩いていると、隣を歩いていたキースが不思議そうにこちらを見ている。

「ウィス様？」

「なんでもない。半期の報告がきているから、しばらく忙しくなるなって思ってた」

「またしばらくは引きこもりですかね」

「いつものことだけだな」

心の中でちゃんと頬を叩いて気合いを入れ、キースとともに屋敷に戻った俺は仕事に取り掛かった……のだが。

「ああ……忙しい！」

「気持ちばかりですが、声に出さないで。文官達の前ではしゃんとしてください」

朝日を浴びながら美しい海を眺め、領内の活気を浴びて清々しい気分です仕事を始めたはずだった

のに。その気分はほとんど保たれることなく、俺はあつという間に忙殺ぼうころされていた。

執務室の机の上の未決の箱には書類が入りきらず、床に置いた木箱に入れられていく。既決の箱は入る端から回収されていくので空っぽだ。

領地経営って半官半民みたいな感じで、昔取った杵柄きねがならぬ、商社勤務だった前世の経験は多少使えるが、いかなせん全てがアナログで量が多い。

捌さばいても捌さばいても終わる気配がないが、捌さばいていかないと終わらない現実が悲しい。一日はあつという間なのに、一週間は長くて、頭がまるでバグってるみたいだ。

とにかくやるかあ……と俺は新しい報告書を手に取った。

「……この地区の数字、違和感があるからもう一度見直してくれ。原因が分かなければ内訳を調べて持つてくるなり、理由を聞いてきてほしい」

この地区は特に減収の要因がないはずだが、上期の中間納税額が不当に少ない。ちよろまかしているなら問題だし、違うなら原因を早めに解明しておかないと。

「これは有料街道の整備工事の予定価格の設定がおかしい。積算の中身をもつと説明してくれるか？ 去年東部の街道工事やっただろ。その時の見積りと比較したいから、探して持つてきて」

こっちはこっちで去年似たような工事をやっているのに、予定価格がその一・五倍はさすがに高すぎる。資材高騰しざいこうとうなどもないはずだから、原因は特定しておかないと。

「災害備蓄負担の見直し？ 何言ってるんだ。今でも少ないくらいだわ」

うちの領地、後ろは山で前は海、デカイ運河もあるんだぞ。地震があつて津波が来たり大雨が

降つて、運河が氾濫はんらんしたり山が崩れたら復興にどれだけかかるか。

川の方は父がやってたのが終わったからいいけど、海はまだまだし、塩害対策えんがいたいさくだつて進みきつてないのにさ。

「ええ……塩の値下げ要望？ うちの塩の価格は、きちんと海水から塩ができるまでの工程を一から記録して、生産にかかる費用の変動幅を加味した上で損益を計算してる。経費が多少上がったも安定供給するためにこの価格設定にして、ある程度は領で買上げもしてるんだ。それを見直したいならきちんとした理由を出して。……関税？ 関税がかかるからこちらに価格を見直せなんて言うところや商会には売らなくていい。全部が全部、慈善事業じぜんじぎょうじゃないんだから、『スワルド公爵領から岩塩を買ってください』でいいよ。塩は腐らないから多少在庫になつても大丈夫だし、他に使い道もある」

みんな見積りや目算が甘いいし、他人の主張を素直に呑み過ぎだ。

俺のところに上がつてきても未決の箱から既決の箱に入るのは三件に一件程度で、後は何かしら理由があつて差し戻しである。報告や案件が既決に入らない様子を見る度に文官の目が死んでいくが、俺だつて好きで差し戻しているわけじゃないからな。

伸びをしながら隣のキースを見れば、キースのところも似たり寄つたりである。

「ウイスタリア様宛の親展文書はこちらの文箱に。一度私の方で仕分け……またこいつか。次回からは私宛に出すよう伝えろ。ウイスタリア様宛なら受け取り拒否でいい」

あゝ……またあの人かな。俺に会う口実が欲しくて、それらしく装った嘆願を出してくる男だ。

しつこいからか、キースもかなり苛々している。

「前回も丁寧に説明をつけて返してやったのに、内容は大きく変わりが無い。それくらいは私のところに上げる前に気付いてくれ……。あとこの地域三つは、報告書の数字が矛盾しているし、こちらに至っては数字が合っていない。こんな状態で上げてこないように。見直しをして分からねければ、差し戻すなり原因を調べることに」

ちよつと言ひ方がキツイ気がするが、さすがに数字が合っていないのは駄目だな。あとでフォロイ入れとか、なんて思ひながら、引き続き聞き耳を立ててみる。

「街の施設の使用料について住民からの苦情、街側からは支払猶予の検討依頼……元々うちが建設資金を出しているのだから、住民から徴収する使用料を下げるべきだろう。採算が合わなければ運営を見直すなり施設を売却するなり一度はその旨きちんと説明して、それでも何か言ってくるようなら私に言ってくれ」

量が多いなあと思ひていたが、俺に上げる前にキースでかなり撥ねてくれているから、キースの仕事量は倍以上である。本当に申し訳ない。俺がもつと余裕あればいいんだけど、ごめん……。ない。余裕ないわ……。ない袖は振れない。自分の仕事をとにかくやらねば。

前世では営業も経理も一通りはやつたし、官民合わせてそこそこ大きな仕事もやつてたから、アドバンテージはあるし、もう少し仕事出来そうなんだけどな……。真のしごできとの能力差が悲しい。

そうこうしているうちに、慌ただしく午前が終わつていく。文官達を「休憩も仕事のうちだ」と

部屋から追い出し、残つた俺達は行儀が悪いのを重々承知でサンドイッチを食べながら、午前に捌いた案件の確認をする。日本のゲームのなんちゃってファンタジー世界だからか、和食はなくとも馴染みのある食べ物はかなりあるので、大変助かつている。

「塩の価格、下げなくてもいいよな別に。正直副産物でも儲かつてるから多少は下げてもいいんだけど」

領地が広大なガルディアは、農業や林業はもちろん、砂糖と塩という生活に欠かせない調味料の製造が主産業だ。加えて前世の俺は塩田地帯の出身かつ、会社でも塩や砂糖関連の仕事に携わっていたから、規模を拡大するアイディアは色々あるし、ガルディアで取り入れたものは今のところ成功している。まあ、そのせいもあつて忙しいんだけど。

なお、それらを実現させたのはほぼキースだから、俺は大したことはしていない。思ひつくことを素直に話してみただけだ。

「下げない方がいいですね。市場的な都合もありますが、スワルド公爵家と揉めると面倒です」
「確かに。また怒鳴りこんでられても鬱陶しいもんなあ」

塩と砂糖の用途は食べるだけではない。医療や美容にも砂糖は使われるし、ガラスがある世界だから塩の需要は工業方面でもあるし、工業製品の材料として塩を売り、副産物で出たものを買い戻して塩害の出ない除雪材を作つたりと、案外こつちの需要も馬鹿にならない。

もう少し工業や科学が発達していたらバイオマスエネルギーとかそつち方面にも使えるだろうけど、そこまで発達はしていないし、流石に門外漢である。

簡単にキースと情報共有しながら、迷っていた案件の方針を決めていく。

しかしところどころ聞いてはいたけど、いいも悪いも色々あるもんだ。

「あの人、また中身の無い嘆願出してきたのか……」

「ええ。今後は何かあれば私宛に出すよう伝え、貴方宛のものは受取拒否することにしました」

「……ごめん、よろしく」

巡回くらいしか人前に出ないのと、夜会とかを開かないのが原因なのかもしれないけど、こういうの•••これで何件目だっけ。現在の国王夫妻が身分差婚をしてからは、恋愛に関する考え方も少し緩やかになってきているからか、俺に直接アクションを起こしてくる人もいるのだが、正直止めて欲しい。いくら緩やかになってきているとはいえ、さすがに高位貴族のほとんどは今でも政略結婚が見合いで、自由恋愛は稀である。

とはいえ、単に俺を見たいのか、本当に直接色々言いたいのか、どちらがメインかよく分からない。ただ、前者はともかく後者が理由だと無碍にはしづらい部分もある。

「うーん……一度夜会に代わる何かを開いた方がいいかな？」

「いいえ。夜会こそ開いておりませんが、ウイス様は領内では頻繁に巡回していますし、よその領主等と比べても手厚い対応をされている。慰勞の際もこちらから訪問しておりますし、夜会を開かない事情は既知の事ですから、不要ですよ」

「だよな。じゃあキースの言うとおりの対応でいいか。あとは……」

他の案件をパラパラ見ても、判断が覆るようなものはひとつもない。

キースの判断基準を信頼して任せているのだから当たり前ではあるが、俺の方でも気にしておかないといけないものがないかだけは一応確認していく。

確認したところで覆るようなものなんて今まであったことないんだけど、ダブルチェックの形骸化はよろしくないもので、ちゃんとしておきたい。

「大体こんなもなか。……しかしこの施設の使用料のやつは本当に駄目だなあ。これきちんと考えて稼働率が上がれば、修繕費とか差し引いたって普通に利益出ると思うけど」

だからこそいい案出して偉い！ という意味も込めてこっちで借金肩代わりして、所有権は街側に持たせたのに、この体たらくはちよつと甘えすぎだと思う。

「助言で改善されればよし、駄目ならこちらに引き上げればいいでしょう。抵抗は入れていますし」

「それもそうだな……って早。キース、ちゃんと囓んで食べてる？」

あつという間にサンドイッチを平らげたキースが、そう言いながら珈琲に砂糖とミルクを入れて混ぜている。ゆっくり食べている暇がないので仕方がないのだが、心配になってしまう。

珈琲を飲みながらも書類から目を離さないキースに「大丈夫か」と聞くと、当然のように「大丈夫です」と返ってくる。

「……もう少し俺に振ってくれてかまわないぞ」

「いえ。以前より馬鹿も阿呆も減りましたから大丈夫ですよ。ウイス様も文官達に負けず劣らず目が死んでいますし、無理はなさらないでください。もう少しで落ち着くでしょうし」

「それはそうかもしれないけど……」

俺とは違って特に無理をしている風もなく、余裕がありそうに見えるが、キースは隠すのが上手い。それにもうひとつ大事なことがある。

「それだけじゃないだろう。お前の後任は本当に大丈夫か？　ちゃんと育ってる？」

「一年あれば何とかなるでしょう。別に全てを一人でする必要もないので、私の所掌しよしやうを複数人で分担すればいいだけだと思いますよ」

「……それもそうか」

確かにキースが何でもできるから全部一人でしているだけで、本来は一人でする必要ないもんな。その辺りは後任の判断に任せよう。城しろから連れてくる人材もいるだろうし。

「よし。俺もがんばろ！」

俺だつてのんびり食事をしている暇はない。キースに負けじとサンドイッチを咀嚼そじやくして、珈琲で流し込み、隅にあったカートにカップや皿を乗せた。

「……でも、本当に無理はするなよ？　引継ぎとか難しかったら、後から追いかけて来てくれるのかまわないんだから」

「そう言つて置いていく気ではないですよね？」

「もうそんな気はないよ」

キースはこちらをじとりと睨み、俺は小さく降参のポーズをして両手を上げた。

「それがキースの意向なら問題ないよ。ただ、もったいないなと思つてしまうだけでさ」

キースはガルディアの分家筋であるウォールズ伯爵家の三男だ。幼い頃、姉リリアーナが王家に嫁ぐことになって跡継ぎがいなくなったガルディア公爵家に引き取られたのだが、俺が産まれて嫡男となつてしまったことから、跡を継ぐことが出来なくなり、俺の従者となつた。

公爵家の跡継ぎから従者なんて、正直恨まれたりいびられたりしても致し方ないと思うが、キースはそんな境遇でありながら、従者としても兄のようにも友のようにも俺を可愛がり支えてくれた。だから本人の意向もあり、俺が公爵家を継いで、キースには家令としてガルディアにいてもらうとぼんやり思っていたのだが――数か月前、内々でリリアーナの結婚が決まった。

それ自体はともめでたいことなのだが、相手の、そしてリリアーナの事情により、俺を含めた公爵家の人間は今後について話し合いを重ねることになったのである。



「姉上とウィルフリード殿下が結婚するのであれば、殿下にガルディア公爵になつていただいた方がいいですね」

俺は迷うことなく、父に自分の考えを告げた。

めでたく決まったリリアーナの結婚相手は王兄殿下。となれば、リリアーナを王都にやるわけにもいかないと父は悩んでいたわけだが、答えは一つしかないだろう。

「……話が早くて助かるが、お前はそれでいいのか」

「全く問題ありませんが……ただ、殿下が継ぐとなると、私が家にいるのもお邪魔かなと思うので、どうしたものかな」

「うちは色々あったので、殿下が我が家を継ぐことになった場合、お前に爵位じやくいのひとつをやる事は了承させている。爵位を得てからキースと結婚すればいいのでは」

「……それだとキースに利点が少ないような。私はともかく、キースには家令として殿下を支えてもらう方がいいかもしれません」

現在は父が公爵で俺が領主代行なので、キースは従者という扱いだ。

一時期はキースが嫌じゃなければ、俺と結婚してガルディアを継げばいいんじゃないかと俺も思っていたので、「公には俺が伴侶はんりよになって申し訳ないけれど、好きな子ができたら俺は何も言わないから困えばいい」と提案したのだが、キースには遠回しに断られている。

だから結婚するなら同等の裁量権さいりょうけんを渡すし、結婚しないなら家令になってもらうつもりだったのだが。

「利点とは……ともかく、キースと話をしておくように」

「はい」

しかし、俺が公爵家を継がないならキースが俺と結婚するメリットは少ないだろうし、俺が爵位を買ったとしても、公爵家よりは下になる。そもそも、次期公爵という立場で話を持ちかけて断られているのに、それより下位になって求婚を受けてもらえるとも思えない。

なら、公爵家の家令の方が断然いいと思うのだが、父は何だか呆れていた。

「リリアーナ様が結婚ですか。それはおめでたいですね……！」

「ああ、本当にな」

父から話を聞いた後、キースにリリアーナの結婚の話をすれば、キースも我が事のように喜んでいる。

「……となれば、ウィス様はどうなさるのですか？ 別の爵位を譲り受ける形になるのでしょうか」

「いや、それなら俺は勉強したいし、国外に出ようかと思っていて」

「国外……!?」

「うん。俺別に当主になりたいわけじゃないし、ガルディアのために働いて、そこそこの生活ができればそれでいいからさ」

今までガルディア公爵家の跡継ぎとして育ってきた俺は、これまで他の未来を真剣に考えたことがなかった。だが、姉の結婚相手が家を継ぐと決まった今、俺は初めて自分自身の未来について向き合うことになった。

なら、これを機にこの国を出て、色々学んだり諸国を旅してみたいと思ったのだ。

「……でしたら私も行きます。どうせ護衛やら使用人やらが必要なんですから、私がついていけば最低限で事足りますし」

「それはそうだけど。お前ガルディアにいたいんじゃないのか？ 家令として殿下を支えてもらう

方がいいかなと思ったんだけど」

「私がいたいと思う限りはずっといいと、言ってくれたではないですか」

「言っただけでも……だって俺についてくるならガルディアから離れることになるだろ」

「遊学のようなものなのでしょう？　一生ガルディアに戻らないというものでもないでしょうし」

「それはそうだけども……」

若干噛み合わないまま散々話し合った結果、俺がガルディアを出るなら、キースはついていくと言って一歩も引かなかった。

「貴方が出す発想を形にするのはとても楽しいですよ。外つ国に行った貴方がどんな事を思いつくかと考えたら、それを形にするのはもっと楽しいだろうと思うのです」

「お前、さすがに結婚を考えなきゃいけない年齢だろう。そんな浪漫を追うようなことをしていいのか」

「そっくりそのままお返しします」

そう言われたら俺は秒で諦めるしかない。俺だってキースと一緒に来てくれるのは嬉しいのだ。

「まあ、キースがいいなら俺はいいんだけどさ」

「そもそもガルディアがさらなる発展を遂げたのは、ウィス様の発想あってこそなのに、ほとんど私の手柄になってしまっていますからね……」

「俺は案を出ただけで、実際に動いて形にしたのはほとんどキースなんだから、別に間違っていないだろ？」

俺は前世の知識からこの世界で実用するためのヒントは出せても、それを実現する力には乏しい。領内産業の改善だって、実際に動いて調整してくれるキースがいなきゃ無理だったと思う。

今でこそ俺の意見は通るけど、以前は「こういうことをしてみたい」とか「ちゃんと視察して回りたい」とか、俺の希望をまともに取り合ってくれたのはキースだけだったし。

大体キースがチートなんだよな。俺の「こんなのはどうだろう」という、ふわふわとした前世の知識からの意見をキースが検討し、実現に向けて動いてくれる。なんでいつもあんなぼやとした内容から、正確に意図を汲み取って理解して形にできるのか。

見た目はよくなっても、中身が平凡な俺にできることといえば、一般的な領主代行の仕事と「責任は俺が取るから好きにやれ」と言って、何かあったときにフォローするのみ。放任主義ともいうそれでこんなに領が豊かに発展するとは思わなかった。もしかすればこの辺りを全部ひっくり回して他力本願な俺のチートなのかもしれない。

だからキース自身が望んで共に来てくれるというのであれば、断る理由はない。

「そうではなく……貴方に注目が集まって狙われてもいけないので、まあ、いいか……」

「そうそう。それでいいんだって」

俺は必要以上に目立ちたくはないし、後の人のために問題は一つでも少なくしておきたい。その一心で一生懸命仕事に励んでいるだけなのでそれでいい。キースが俺と一緒にガルディアを出ることが決まった以上、どう足掻いても文官たちは苦勞することも増えるだろうが……

俺はもう、キースが選んだ道を受け入れようと決意している。

そんなこんなで、リリアーナの結婚と俺たちの旅路に向けて、仕事に励む日々。

忙しいのはいつものことだし、それはもういいのだが……

「……ごめん、キース。俺、ちょっと姉上[・]のところに行つてくる……」

「承知しました」

気合を入れ直してはみたものの、いい加減集中力が続かなくなってきた。申し訳なく思いながらギブアップをさせてもらい、心の底から謝れば、キースは苦笑いをしつつも許してくれた。

「ウイス様のご判断が必要なものは、また後ほど整理してご説明させていただきますので、ゆつくりして来て下さい」

「うん……ありがと」

執務室からよろしながら出た俺は、侍女たちに執務室にみんなの分のお茶とお茶菓子を持っていくよう指示してから、中庭を通つて更に奥へ向かった。

そこには許可された者しか近付けない、こじんまりとした離れがある。

古びた木の扉をこつこつ叩くと、ややあつて扉の向こうから、美女が姿を見せた。長い銀髪を緩く結んだその人は、俺を見てふわりと笑った。

「ウイスタリア、お疲れさま」

「顔を見せるのが遅くなりすみません、姉さん[・]。体調はいかがですか？」

「ここ最近はずっと体調がいいから、今日も元氣よ。貴方こそ忙しそうだけれど……大丈夫なの？」

「ええ、逃げてきました。匿^{かま}つてください」

俺がそう答えると、リリアーナは笑つて招き入れてくれた。その柔らかな笑顔は、とても悪役のものとは思えない。

リリアーナ・ガルディア。

彼女は女主人公が王子ルートに進んだ場合における、いわゆる悪役令嬢である。

ゲームの中のリリアーナは、このルストナークの正妃の子である第二王子の婚約者だ。女主人公が王子の好感度を上げて王子ルートに進むと、恋路の邪魔をする役割を担うこととなり、嫉妬から様々な嫌がらせ等を行った末、魔族に唆されて王都に魔物を大量発生させるといふ事件を起こしてしまう。その事件を起こした罪と、女主人公に行つた諸々含めて公衆の面前で断罪され、婚約破棄の後、王都から離れた領地に追いやられる。

それだけならまあ、昨今よくあつた悪役令嬢っぽいテンプレ展開だよなと思う。

ただ——ここからはゲームではなく、今俺がいる現実起こつた話。

リリアーナは当時の国王陛下と、宰相である父が外遊で不在の際に事件を起こし、貴人用の牢に軟禁^{なんきん}されたのだが——数日後、そこから出されたときには、心身ともに病んだぼろぼろの状態で、記憶も定かなくなつていた。

そして二か月後。彼女が子^{はら}を孕んでいる事が判明した。

その孕んでいた子が俺だ。

大貴族にしては珍しく恋愛結婚で、愛妻家として有名だった父——祖父が、大切な忘れ形見の嫡男を、掌中の珠として領地に隠しているというのは、あくまで表向きの話。

リリアーナは領地に移されたあと、俺を秘密裏に出産した。現在は快復しているものの、心身を壊していた彼女は牢に入れられてからの一切の記憶をなくし、俺を産んだ記憶もない。

リリアーナが俺の母親であることは、ガルディアの中でも数人しか知らないトップシークレットであり、俺自身もそれを知らないことになっている。

リリアーナを襲った犯人と思しき者は複数いて、俺の父親が誰かは分からない。リリアーナの記憶がない上に、当時の牢番の騎士、侍女、下働きに至るまであつという間に全て消されてしまったそうだ。

一人娘に起こった数々の出来事に、心労が祟った祖母は俺が産まれてすぐに亡くなった。

俺はガルディア家に遅くに出来た待望の嫡男、そして祖母の忘れ形見として国に届け出られ、公的な父母は祖父と亡くなった祖母となつている。実の母であるリリアーナは姉ということになり、産まれた俺とともに引きこもり、世俗から完全に離れて領地の屋敷の、更に奥で暮らしている。

しかし記憶をなくして世俗の一切を遮断したこと、また、母を亡くした可哀想な弟を育ててやらねばという責任感からか、リリアーナは少しずつ自分を取り戻すことができていた。

失った記憶部分については、罪を犯したあと、領地に封じられて病気になる、子の出来にくい身体となったという説明をそのまま信じている。

俺の母さん。

そう呼ぶことは、決してないのだけれど。

俺は前世の記憶と臆気な赤子の頃からの記憶を頼りに、こそこそ調べて真実を知ったのだが、この話題を掘つたところで何もいいことないなと思い、そつと記憶に蓋を閉じた。

前世でもリリアーナは気の毒だと思っていたクチなのだが、現実はずっと酷い。王妃になるような深窓のお嬢様が牢に入れられて、身籠つて心身を壊している。

その結果産まれた俺は、恐らくこのこともあつて、基本的にガルディアから出されず、大貴族の嫡男として通常行うべき他の貴族との交流等が避けられている。

ただ、前世の記憶などない貴族の子どもであれば、何故だともつと悩むところだろうが……俺は前世でも会合や飲み会はそんなに好きじゃなかったし、引きこもりと呼ばれようが、どうしようが別に何も気にならない。

勝手に断られているものもかなりあるだろうけど、行動も特段制限されているわけではないし、それでリリアーナを護ることができるのであれば、全くもって問題ない。仕事も好きなこともさせてもらっているの、どちらかというと甘やかされている方だ。

そんなことを思い返ししながら、丁寧な紅茶を淹れるリリアーナを見ると、いつも以上に嬉しそうな気がする。

「ここ最近というか……姉さんの調子がいいのは、ウィルフリード殿下が来られるからでしょう」

「……そうね。そうかもしれないわね」

淹れてくれた紅茶を飲みながらそう投げ掛ければ、リリアーナは珍しく否定しなかった。

「姉さんも年貢の納め時ですか」

そう揶揄^{からか}われて頬をさつと赤らめる姿は、若々しく美しい。

流れるような銀の髪に、ガルディアの海を思わせる瑠璃色の瞳。三十代も後半なのに見た目がゲームで見た十代の姿とほとんど変わらない。

このゲームには主人公をはじめとして、精霊の加護持ちという、精霊魔法が使える者がいる。弱くはあるが、俺とリリアーナにもその精霊の加護がある。

この世界は、ゲームの世界の割には魔法が一般的ではない。無属性魔法……生活魔法、補助魔法とでも言うのだろうか。暗いところを照らしたり、物を綺麗にしたり、軽く身体を強化したりというのは、魔力があれば誰でもできる。しかし、炎や水を出したり、風を起こしたり地面に穴を開けたりする——いわゆる属性魔法は、精霊の加護というものを持っていないと使えないのだ。

加護持ちは普通の人間と若干身体の作りが異なるやら、精霊に近いやら何やらで性差が普通の人より曖昧^{あいまい}なのだと言われている。成人以降の年の重ね方も緩やかで、精霊が長く愛^めでるためとか何とか色んな説があるらしいが、本当のところは分からない。

そして、精霊魔法以外の大きな特徴が、生殖能力^{せいしんりょく}にもその性質が表れることだ。この世界でも基本的には男女で子を為すが、加護持ちは性別に関係なく子を授かることができる。男は子を宿することも宿させることもでき、女もまた同様に、子を宿することも宿させることもできる。相手に加護がなくてもこの性質は失われないので、加護持ちは男同士でも女同士でも婚姻が可能なのだ。

ちなみにこれを閨教育^{かんきょういく}で習ったとき、俺は知恵熱を出して寝込み、今でも事あるごとに揶揄^{からか}われている。

「私のために継承権どころか、王家との縁まで切ったと言われてしまったら、もう傾くしかないと思うのよ」

「まあ、確かに。ある意味脅しですよね」

頬に手を添えて困ったように笑うリリアーナの瞳——ガルディアの海と同じ、美しい瑠璃色の瞳は澄んでいる。

「そうそう、来てくれてちょうど良かった。今年のお祭りで配るものなんだけど、こんな感じでどうかしら」

「——今年も素晴らしいです。本当に助かります！」

異世界転生ものよくある例に漏れず、俺も学校教育を検討したのだが、大々的な予算、意識改革……裕福なうちの領でも単独では無理だと早々に諦めた。子どもが産まれた家に絵本を配付する絵本事業なんていうのも色々考えたが、識字率の問題もあるし、予算も足りない。なによりぶっちゃけ、絵本を配ったとて本当に必要な層には売られてしまって終わるだろう。

代わりに何か低予算で出来ないかと考えたのが、夏祭りで配る団扇^{うちわ}だ。お洒落さの欠片もないが、田舎出身の会社員の発想なんてそんなものである。

ただのチラシよりはマシだろうととりあえず、厚紙に指を入れる穴を抜いた丸団扇を作って、表にスポンサーの広告を入れ、裏に文字や数字の一覧……あいうえお表とか九九表みたいなものを印

字してお祭りで配っている。前世で一般的だった団扇の骨組みが分からなくての苦肉の策だったが、必要なのは厚紙のみと低予算なのが功を奏したのか、するっと案が通ったのだ。

ただ、発案してみたのは良かったが、残念ながら俺は絵について壊滅的にセンスがなかった。猫を描いたはずなのに、生き物であることすら誰も当ててくれなかった。

キースも他の文官も下手ではないが、上手くもなく似たり寄ったり。だからといって外注に出す予算はない。そこで救世主となったのがリリアーナである。

「大袈裟ね」

「いやいやいや……本当に助かっているの……」

リリアーナは貴族令嬢らしく手紙を書くのが趣味で、字も美しかった。絵も上手いし刺繍なんかも上手く、構図からきちんと考える。ものは試しとデザイン諸々を考えてもらったのだが、これが素晴らしかったのだ。

今では領内で必要なデザイン系全般と、俺宛の手紙の返事の一部については代筆もしてもらっていて、非常に助かっている。

「あと預かっていた分のお手紙とその控えよ。こっちはそのままお返ししていいと思うけれど、こっちは一応お父様に伺ってから出した方がいいわ」

「ありがとう、姉さん！」

ああ、本当に助かる……！ こういう判断もしてくれるから本当助かる！

俺は上下に挟まれる悲しき中間管理職だったので、やんわりとした言い換えやオブラートに包む

言い回しはそれなりにできるが、貴族の言葉遊びは正直かなり苦手である。

「苦手なのは分かるけれど、多少は自分でもやりなさいね……まあ、ウィル」

リリアーナの気遣いに感謝していると、にこにここちらを見ている美丈夫と目が合う。

俺はパツと姿勢を正し、頭を下げた。

「ようこそいらつしやいました。殿下、お声掛け下さればよかったのに……」

「堅苦しいのはいいよ。麗しい姉弟が仲良くしているのを眺めているのもまた、目の保養だからね」

いや、お邪魔虫は退散するから普通に声をかけて欲しい。

「姉が今か今かと待ち侘びていたので、馬に蹴られる前に私は仕事に戻ります。何かございましたらお申し付けください」

「うん。後で執務室に寄らせて貰うね」

「もう！」と怒るリリアーナと、小さく手を振るウィルフリード殿下を横目に見ながら、俺は平和な場所から修羅場へと戻っていく。

夕食後、言っていたとおり執務室に寄ってくれたウィルフリード殿下を迎え入れ、雑談を交えながら領政について引き継ぎを行っていく。こうしてリリアーナを訪ねてくれたついでに、ウィルフリード殿下には少しづつ領運営の引継ぎをしていて、それももう終わりを迎えようとしている。

「同情を誘う作戦は上手くいきましたね。若干脅しにも見えますが」

「ふふ、リリアーナは優しいからね」

「……除籍が認められて良かったです」

「ありがとう。話は前に向かっているから頑張るよ」

ウィルフリード殿下は、リリアーナの元婚約者である現国王の異母兄——つまりは第一王子である。異国の貴族の血が入っているため、この国では珍しい赤髪碧眼の男前だ。

こんな柔和な男前なのに、ゲームではモブというか、ほぼ設定だけのキャラというか。最初に会った時、「こんなもったいないことある？」なんて感想を抱いたものだ。

そもそもリリアーナは第二王子と婚約する前から、このウィルフリード殿下と想い合っていたらしい。ところが国で一、二を争う裕福な大貴族かつ宰相を父に持つリリアーナが、第一王子と結婚するのは国内のパワーバランスを崩しかねないため認められず……結局第二王子の王位継承を磐石のものとするためにと請われ、リリアーナは第二王子と婚約した。王家からの打診を蹴って他の人間と婚約することは不可能で、リリアーナはそれを受けるしかなかった。

それなのに、婚約者である第二王子は女主人公と恋仲になる。かといって王位継承の事情もあるから、自分からは婚約破棄できない。

そんな時に事件が起き、これ幸いとリリアーナは婚約破棄及び断罪されたのだ。

確かに女主人公に嫌がらせをしたり、王都に魔物を呼び込んだりしたのはリリアーナが悪いんだろうが、何とも都合主義的な事だろうか。

事件当時、第一王子だったウィルフリード殿下は、王都を混乱に陥れた事件を起こした上に、身

体を壊して子も望めないと求婚を拒み続けていたリリアーナを、ずっと優しく愛し続け、自分との結婚を考えてほしいと根気よく説得した。

祖父から俺の出生の秘密を明かされた上で、だ。

憎まれても致し方ないのに、この人もまた、愛する人が産んだ望まれない子に対してまるで弟のように我が子のように接してくれる素晴らしい人である。

何なの、俺の周り聖人君子ばかりなのかと、割と本気で思う。

リリアーナは罪を犯して以降領地に籠っているが、実際は魔王討伐後に王太子となった第二王子と女主人公が結婚する際に恩赦が与えられている。魔物の王都襲来はあったものの死者が出ず、被害者にはガルディア公爵家より少ない賠償を行い、自費で王都の復興を行ったこと、城でリリアーナの身に起こったことを総合勘案してのことだという。

リリアーナが俺を産んだことは、祖父と祖母を始めとした何人かの故人、あとはウィルフリード殿下とキース、古参の使用人くらいしか知らないが、そうでなくても牢でリリアーナがどんな目にあったかを察している人間もいる。俺が決定的に貴族の集まりを嫌うようになったのも、そのことを嬉しげに俺に囁く人間がいるからだ。

殿下はリリアーナと結婚した後、彼女がそういった悪意に晒されないために、自らの持つ王位継承権を放棄し、王族から外れることを願っていた。

しかしながら、王位継承権の放棄は現陛下の立太子後すぐに認められたものの、除籍は長らく認められず、王家に二人目の王子が産まれたことでやっと認められたのだ。

「稀代の宰相とその優秀な息子が治め、発展を遂げたこのガルディアを、私が継いでもいいものかというのは今でも甚だ疑問ではあるんだけどね」

「ご謙遜を。父はともかく私は大したことはしておりません。元々父はキースに継がせるつもりだったわけですから」

王族直系が臣籍降下するなら、大抵は新たに公爵位を賜ることとなるが、ルストナークには既にガルディアとスワルドという他国の辺境伯領を兼ねた二大公爵家があり、力のある侯爵家や伯爵家も複数ある。

加えて新たに封じる領地にも乏しいため、そのままであれば法服貴族として、王都か直轄地を治める形になるが、それだとリリアーナが王都や王家に近い場所に行かなくてはならなくなる。

それよりはウィルフリード殿下に婿入りしてもらう形で二人がガルディア公爵家を継いだ方がいいと、祖父と俺でそう結論を出したのだ。

俺が跡継ぎなのを微妙だと思っているキースの支持者もいるし、むしろウィルフリード殿下が継いでくれた方が後腐れなくていい。長女に王族が婿入りして跡を継ぐことに文句を言える人間なんてそうそういないからな。

「ガルディアを妬む者も増えてきました。そこらの対処を殿下に投げる形になりますが……殿下ならその辺りの対処は私よりずっと上手いでしょう」

あと、俺とキースが商売や諸々の開発で生でしまった多少の軋轢を対処するにあたって、ウィルフリード殿下以上の適任がいなかったというのもある。

ガルディアは元々豊かだし、祖父も領主として少しずつ発展させていたけれど、宰相位にいる以上は行き届かない部分も多く、新しいことに取り組むのは厳しいのが現状だった。

それを俺とキースでフォローしたり見直したりで、どんどん領は発展していったのだが……楽しくて、ちよつと調子に乗ってしまった感は否めない。

その尻拭いをさせるのは心苦しいが、そちらの意味で周囲を黙らせるのにも、ウィルフリード殿下が継ぐというのはうってつけなのである。

「買い被りすぎだよ」

ウィルフリード殿下は困ったように笑い、そのまま眉を下げた。

いやいや執務能力もさることながら、宰相が信頼する城内の調整能力は過大評価でもなんでもないでしょうよ。領地運営という未知の領域ということでは不安になるのかもしれないが、俺からすれば、殿下も仕事のできる人である。

「……本行ってしまうのかい？」

「はい。ただ、キースは残ってもいいと思うんです。私についてきたら才能を持ち腐れにさせてしまいかもしれないし、婚期だって逃してしまうかもしれない……。本当に連れていくべきか、正直今も悩んでいます」

「君がガルディアを出るというのならば、ちゃんと連れて行ってあげなさい。彼は君の従者で、君への献身が、彼の悦びなのだから」

「はい」

間髪入れずにそう答えてみるが、何故ここまでキースが俺に心酔しんすいしてるのかは本当に謎である。ただ、色々思うところはあるけど、いい大人が自分で選択したことだ。本人がいいと言うのなら、止める理由も手立てもないし、キースと一緒にするのは嬉しいから、俺はありがたいんだけど。

「……分かってなさそうだね」

「いや、だって……そもそもキースは跡継ぎの座から外れた後も、ガルディアにいたいという理由で侍従になったと聞いていますし。大体私、一度は結婚を断られてますからね。その割にはずっと一緒にいてくれるから、よく分からなくて」

「……嘘だろう？」

「いえ。残念ながら事実ですけれど……」

ウィルフリード殿下は驚いた顔をしたあと、考え込むように額を抑えている。

「いやいや、そんな考え込まなくても、俺のことはいいんだよ。」

「まあ、ガルディアと縁を切るわけではありませんし、時々帰って来させてくださいね」

「もちろんだよ」

「たった一人の大事な姉です。何かあれば尽力いたしますから、遠慮なくお申し付けください……義兄上」

その言葉を聞いたウィルフリード殿下はにこりと笑った。

「基本的には自分の力でできるだけは何とかするけど、リリアーナのことはすぐ協力要請するから覚悟しておいてね。私は……自分より何より、彼女の方が大事だ」

真剣な顔でそう言い続けているこの人なら、きっと大丈夫だろう。

俺はこの人の腕に、早く母を託してあげたいと思った。

ウィルフリード殿下が部屋を出ると、廊下に靴音が響き遠ざかっていく。まだほんのり温かさの残るカップを片していると、入れ替わりのように扉を軽くノックする音がした。

どうぞと言えばキースが静かに入室し、カップを銀盆にまとめながら新しいお茶をてきぱき用意していく。礼を言いつて淹れてくれた紅茶を飲むと、一日の緊張をようやく手放せた気がした。キースも向かいに座って同じように紅茶を口に運びながら、ほっと息を吐いている。

しばらく言葉もなくしみじみ楽しんだ後、ウィルフリード殿下と話したことを話題にすれば、キースは形のいい眉を顰める。柔和な顔立ちに陰しさが一瞬だけ宿った。

「殿下が婿に来てくださるのであれば、長子の婿が跡を継ぐか、嫡男が跡を継ぐかの二択しか議論の余地がない。私が跡を継ぐなんて馬鹿な選択肢はなくなりますから、ありがたいことです」

「キースは優秀なんだし、元々そのためにうちへ来たんだから、馬鹿な選択肢というのは言いすぎでは……」

「それで貴方に酷い態度を取る馬鹿がいるので」

「それは昔の話だろ」

確かに、年齢が一桁くらいの頃に、そういうことがあったのは事実であるが、もう十年以上も経つのもよきもあ。今でも当時と変わらない熱量で怒ってくれるキースに思わず苦笑してしまう。

あの日、俺は古参の使用人達の陰口を聴いてしまい、一人落ち込んでいた。

誰にも見つからないようにこっそり隠れていても、キースだけがいつも俺を見つけ出し、そっと寄り添ってくれるのは常のこと。だから今日も、隠れてすぐにキースに見つかった。

「ウイス様。どうかされましたか」

「……キース」

黒髪灰目の美少年。しかもとびきり優秀な。そりゃあこんなよくできた子を連れてきておいて、跡継ぎができたからポイはない。

長くガルディア家を見てきた人で、リリアーナの事情や俺が本当は祖父母の子ではない——嫡男ではないと知っている人ならば、余計に納得いかないだろうとは思う。

「キースは跡継ぎとしてガルディアに連れてこられたのに……嫌じゃない？」

「……何故？」

思わずそう聞いてしまったが、キースは気にした様子なく、本気で不思議そうにしている。

「だって……」

「私は元々貧乏貴族の三男坊ですよ。家にいたって跡を継ぐわけでもないですし、下手をすればまともに育つことが出来たかも怪しい」

「そうかもしれないけど……」

「私は貴方が嫌だと言わない限り、お傍にいます。貴方とガルディア家の皆様が好きですから」

灰の目がまっすぐに俺を見ている。その真摯^{しんし}さに、ぐずぐずとした言葉は喉の奥に引っ込んだ。

「ウイス様」

キースは俺の涙を拭い、両手でそつと頬を包み込む。

「どうか、心無い言葉に耳を貸さないでください。先に言っておきますが、貴方に色々と言う者は、どうせ私にも今後色々言いますよ。例えば、貴方は加護持ちだから、『子を誑かして家を奪おうとしている』……などよね。気にするだけ無駄です」

「……たしかに？」

「でしょう？」

身も蓋もないが、確かにそのとおりかもしれない。色々文句を言う人間に限って代替案もなにもないなんて、前世でもよくあった話だ。

「覚えていてください。私は単に、貴方の傍に、ガルディアにいたいだけなのだと」

「……うん、わかった。キースがいたいって思う限り、ずっと、いて」

「はい。ただ、どういう役割でいるのが正解なのかは、今後考えないと駄目ですけどね」

「役割とかじゃなくて、キースの好きなことをすればいいんじゃないかな」

「そういうわけには……」

「悪事に手を染めるようなのは駄目だけど、それ以外なら役割とかなくても……キースはキース

だし」

「……そうですね。私もウイス様がウイス様だから好きなんですよ」

「うん。じゃあ、同じだな！」

何だか嬉しくなつて笑えば、キースもほつとしたように微笑んでくれた。

あれからずっとキースはその言葉通りガルディアに、俺の傍にいる。

◆

「あの頃はみんな、俺のことをどう扱っていいのかわからなかったんだろうな」

幼いころから優秀だったキースを跡継ぎの座から蹴落とした上に、祖母も俺が産まれてすぐに亡くなっているし、昔からガルディア家にいる人からすれば、俺は不幸の象徴みたいなもの。

今思うと、冷たく当たっても致し方ないと思うが、リリアーナは俺のことを、*“弟”*で*“嫡男”*だと信じているし、祖父も俺のことを息子として、大事に育ててくれていた。一番辛い当事者達がそうしてくれているのを無駄にはしたくなかったから、「俺のことは嫌いでもいいから、父上や姉上に知られないようにしてくれ」と正面から言えばちゃんと態度は改善してくれたし、別に悪い人達ではないのだ。

「器が大きいというか、甘いというか……」

そんな昔話にキースは呆れているが、俺だって辛くなかったわけじゃない。

でも大事にしてくれている人がいるのは分かっていたし、何より俺には前世の記憶があつて、赤子の頃から見聞きしたことを客観的に色んな立場で理解もできていたからかな。

ただ、何も知らない子どもなら当然傷つくだろう。キースがそういう意味合いで心配して怒ってくれているのも分かるし、それは幼い俺にとって心強いものだった。

「……どうかされましたか」

「ううん。何でもない。最初だけで、あれ以降はみんな優しいのに」

「幼い子どもにあんな態度を取る時点で駄目でしょう」

「古くからいる人は仕方がないと思うよ。だってみんな、キースのことも大事なんだからさ」

「それは……」

「な」

「……あれでちゃんと理解したから、よしとしています……」

だが、俺を虫のように毛嫌いしていた面々は、年齢的に引退したというよりキースが追い出したんだろうなという気はする。キースは俺のことになると少しやり過ぎの気があるので、これは今後

も気を付けておこうと、改めて心に刻んでいた。

ウィルフリード殿下への引継ぎも進んで、上半期の報告やら何やらも終われば、ガルディア公爵領も通常営業に戻る。

やれやれ終わった終わったと一息つきながらのんびり祭りの準備をしていると、王都から祖父が帰ってきた。

「お帰りなさい父上」

「ああウイス、今戻った」

キースに荷物を預けている祖父は、もう還暦が近づいてきているというのに、相変わらず若く見える。

祖父であるロータス・ガルディアは、若くしてガルディア公爵家の当主となり、長きにわたってルストナークの宰相を務めてきた冷酷な美丈夫である。

緩く編んだ見事な銀髪と、鮮やかな紫の瞳。俺とほぼ同じ色合いだが、青と紫のグラデーションをした俺の瞳とは違って、純粹な紫水晶のような瞳をしている。そして俺より若干男らしい見た目と体格をしているので、大変羨ましい。ゲーム内で出番の多いサブキャラだが、どう見てもメイン寄りの見た目をしている。そしてあまりに若々しいので、ゲームの説明書に書かれた年齢がアラフォーであることに、誤植ではないかとプレイヤーがネットでざわざわしていた記憶がある。

祖父には精霊の加護がないはずなのに、謎である。

「上期のご報告でしたら、こちらから伺うつもりでしたが」

「いいや、それも聞くけれども――」

感情をあまり表に出さない祖父にしては珍しく妙にそわそわしている。俺は首を傾げたが、悪い話ではなさそうだ。

「他に何か？」

「……やつと宰相を退くことが決まった」

「……！ おめでとうございます」

祖父は幼馴染である先代国王の即位時からずっと宰相位についている。

表向きは娘の罪の責任を取るという体で、本当はリリアーナの身に起きた理不尽極まる事件に怒り、宰相職を退こうとしたこともあるのだが、それに待ったをかけたのが先代国王だ。

ちなみに三年前に亡くなった彼は、気が弱く為政者としての能力は高くなかったが、とても優しい人だった。亡くなる少し前にも拝謁させていたのだが、俺にもリリアーナにも最後まで謝罪の言葉を述べるような、王らしくない印象の人だった。

祖父はそんな幼馴染を見捨てきれず、リリアーナの一件に思うところはありつつも、彼が王である間のみという条件で宰相であり続けたのだ。

そして祖父は約束通り、先代国王の喪が明けたらすぐに宰相職を退く予定だったが、三十年近く勤め続けたものを引き継ぐのはなかなかスムーズとはいかず、ずるずると役職についている状態が続いていた。

ノブレス・オブリージュを絵に描いたような人なので仕事はきちんとしていたが、本人は早く辞めたがっていて、ここ最近はやいちょい愚痴も零していたくらいだ。

「それにあたって長年の貢献と功績を讃え、王城で晩餐会を開いてくださるらしい」

「そうなんですネ」

「不要だとは申し上げたのだが、まあ、新しい宰相の顔見せも兼ねてと言われては、断りきれなくてな……嫌かもしれないが、お前とキースと一緒に来て貰いたい」

「勿論です。いくらなんでもそれは参加しますよ……」

確かに俺は貴族の集まりである茶会や夜会が嫌い、ここ数年一度も行っていない。

「ただ子どもじゃないんだから、さすがに身内の勇退の晩餐会に行くくらいの分別はある。何日間かぐらい我慢するさ。」

「実質、父上も私も表舞台に立つのはそれが最後と考えていいのでしょうか？　なら記念に目一杯楽しむとします」

「頼む。それと、求婚の断り文句を考えておくように。恐らく死ぬ程来るぞ」

「……死ぬ程……ですか」

ええ……自分の見た目が人目を惹くのは理解しているが、そこまでだろうか。

線が細くて男らしくはないし、かといって女みたいな柔らかさがあるわけでもない。祖父やキースと並ぶと中途半端さが顕著になるし、公爵を継がないことも決まった今、一体どんな層が俺を狙うのだろうか。

「お前の場合、見目もよい上に男でも女でも結婚できる。そしてガルディアの新規事業のほとんどはお前が領主代行になってから行われ、今のところ全て順調だ。お前に全てを言っていないだけで、婚約についての打診は元々多い。露出のない今ですらな」

「うえ……」

一気に晩餐会に行く気が削がれた。

祖父の言う通り俺は一応加護持ちなので、男女両方から婚約の打診は確かに来てはいたが、直接

迫られるのは嫌すぎる。もちろん全て断るつもりだが、貴族同士の駆け引きには慣れていないし、間違った言葉選びをしてしまったらと思うと溜め息しかでない。

「というか、精霊の加護持ちというだけでそこまで需要があるのか？」

精霊の加護を持つ人は、何十人かに一人位の割合でたしかにそれほど多くはないのだが、その加護によって使える精霊魔法は、大体は実用性がない———というか、シヨボイ。例えば、火は種火程度、水はコップ一杯程度を出すくらいしか出来ないのだが、それでも加護は加護ということらしい。シヨボイでもそれなりに希少だからと、精霊の加護を持つ子が産まれると国に届け出る義務がある。だから加護持ちであることは割とオープンな情報なのだ。

「うう……嫌だなあ……」

「なら一層のこと、これ以上ない程着飾って、高嶺の花感を最前面に押し出すのが一番だと思うのですが」

「嘘だ。お前は無駄に俺を着飾りたいだけだろ」

祖父と俺に珈琲を渡しながらキースがそんな提案をしてくるが、それっぽいこと言ったって駄目だ。騙されないから俺は毛を逆立てた猫のようにキースを威嚇した。しかし———

「私もキースの意見に賛成だな。キースに任せよう」

「父上！」

祖父はまるで茶会のように優雅に珈琲を飲みながら宣告し、俺の格好をちらりと見て、眉を寄せた。

立ち読みサンプルはここまで

「お前は顔がそれじゃなかったら、正直どこの下官かと思うぞ……。それなりの立場がある人間はそれなりの服を着ないと、下の者はお前以下の服しか着られないのだから。もう少しどうにかしなさい」

「……そうなのか？」

「そうですね。まあ質自体は最高級のもので、領内では問題ありませんが」

「キース、甘やかし過ぎだぞ。とにかくお前に任せると地味過ぎて服装規定に反しそうだから、キースに任せるように」

「いや、流石にちゃんとしたから」

「いや、当てにならない。これに関しては」

「そんな……」

キースをちらりと見れば、「だからいつも言ってるのに」と言わんばかりの見事なしたり顔でこちらを眺めている。

くっそお、腹立つ……！

唸っていると、キースは小さく噴き出したあと、くすくすと笑った。

「心配なさなくても、ウィス様が嫌がるような衣装になかしませんよ。豪華な衣装というなら、まだ結婚式もあるでしょうし」

「結婚なんかしたくないんだけど……」

「ウィス様……」

キースは俺のことを「しょうがない人ですね」と子どものわがままを眺めるかのような目で見ていた。

けどさ、俺は唯一結婚を考えられる相手だったキースに結婚を断られたの、割とショックだったんだぞ。男から男にそういうことを言うの、この世界ではそこまで珍しくないかもしれないが、俺的には結構勇気振り絞ったんだからな。

ちよつと勘^ずねた目でキースを見てみると、祖父が軽く撫で叩くように俺の頭に手を置いた。

「殿下とリリアーナの間には子が出来ないだろうから、可能ならお前の子にガルディアを継いで貰えたらと思うが……嫌なら結婚はしなくてもいい。元々分家筋のキースに継がそうとしていたんだ。同じように優秀な誰かに継いで貰えばいいだろう」

望まない結婚は不幸の元だ。

そう小さく呟いて、祖父は俺の頭を撫で続けている。

零れたそれは、後悔の滲んだ声だった。俺はそれに気付かない振りをして頷く。

ちびりと飲んだ珈琲は、いつもより少しだけ苦い気がした。

◆

花を愛する光の女神エレナの名に由来する、ルストナークの都エレノリア。

女神への感謝を捧げる意味を込めて名付けられたその都は、常に季節の花々が街の至るところで